

泉

いずみ

―目次―

表紙 「能登地震の傷跡」

百折不撓 「能登地震から」 野呂大悟

能登地震現地報告 野呂美道

連載 「私の出会った神様たち③⑥」

ともに歩み 命に寄り添う⑪ 浄香

掲示板・お知らせなど

*付録 ハザードだより (能登震災報告)



崩れたる 能登にも きつと若葉燃ゆ 博子

今年の桜はあつという間に満開になり、あつという間に散っていったような印象でした。満開に咲き誇り、雨と風で、気付けばいつの間にもやがて葉桜に。少し名残惜しさもありつつ、また来年の桜に思いを寄せながらの、今年度のスタートになりました。

「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同（年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず）」

という中国の詩があります。花は毎年同じように咲き誇るが、去年の花びらとはまた違う花。人の人生も、時は同じように流れるが、常に移り変わり、同じことはない。と捉えようとすると、だからこそ、今この瞬間を大切に生きるというメッセージを読み取ることが出来ます。

お正月の能登地震から早4カ月が経とうとしています。時が経てが経つほど、人の記憶は薄れていくのと同じく、4カ月経つと、今や報道などではほとんど扱われなくなりました。しかし、まだまだ地震からの復興の目途は立たずに苦しんでおられる人々も多くいます。先日ご紹介した障がいある方の広域避難も、4月から輪島で無事受け入れ体制が整ったということで、3月いっぱいまで愛知から石川県へ戻られて、今は生まれ育った地元で新たな生活をスタートされています。

今回の一連の取り組みで、やはり身に染みて思ったのが、とにもかくにも人との繋がりの大きさです。私たちの福祉の仕事は、東日本・熊本・能登という大きな地震（災害）やコロナ禍というパンデミックを経験して、有事に備えるためそのたびに膨大な計画を作成し、様々な行政機関に提出しなければならぬ義務が求められ、組織内でのシステムの構築など減災に向けた取り組みも急務となってきました。ただし、大災害においてはまったくの白紙からスタートしなければならぬ可能性が高いということです。行政機関などの公的な援助が届くのは、かなりのタイムラグがあるということ、大きな団体はマクロな支援は強いけれど、ミクロな支援までは届きにくいこと、震災は初動と発災してからの数日間（公的な援助が届くまで）が最も重要な期間であるということ。計画通りにはなかなかいかないということ。個人で判断できる程、余力と余裕がないということ。組織を機能化させるための人材も同じ被災者であるということ。

様々な課題が浮かび上がるうえで、それを乗り越えるためには、助けて欲しいと言いつつ合える人と人との繋がりこそが結局は最も必要だと本当に実感させられました。行政機関の判断を待っていたり、所属団体の援助を待っていては、助かるものも助からない。と考えたとき、やはり人は人と繋がり合っていると実感のうえに生きていく。そのご縁を作る場が「お寺」の存在になっていくのではないのでしょうか。

◆日程 3月27日 七尾市内・28日 七尾市内
 寺院の瓦礫片付け・29日 輪島市内視察

◆参加者 土方匡紀、中野静梨奈(以上高校生)、
 野呂美道、野呂博子、中野了(以上大人)

◆27日 運転手募集の
 寺報の記事を読んだ、隣
 寺の若院がその役を担っ
 てくれた。まさに救世主

。5人に乗せたミニバン
 は順調に能登教務所に到
 着。数年ぶりにお会いし
 た竹原所長と、硬い握手
 を交わした。義援金を
 渡し、地域の様子を見に
 行った。◆そのあと、高
 澤蠟燭さんを訪ねた。す
 でにテレビではたびたび
 登場する社長が私たちを



待っていた。店は前半分が全壊、後ろの土蔵造り
 の母屋も土台がずれ、壁が崩れ、危険な状態に
 なっている。この建物は歴史的建造物で、いずれ
 は現状復帰したいと社長は意気込んでいた。しば
 らくは仮店舗で営業する。周りの通りには一階が
 崩れてその上に乗った土蔵の建物や、ゆがんだ
 ビル、崩れてしまった民家など、被害は甚大
 だった。ところが、新建築基準法に合致した新し
 い建物は、土台から全く被害を受けていなかった。
 それらが乱立している一本杉通り、住民はお隣ど
 うし、明暗を分けた。複雑な気持ちで日々を

過ごさねばならない。あくる日、蠟燭屋さん
 の仮店舗で買い物をした。安泉寺で使用する蠟
 燭は、この高澤蠟燭店で製造されている。ここ
 と取引がある名古屋の三清という店から私は購
 入している。そんなご縁もあり、是非訪ねよう
 と思った。◆社長に教えられて、城山(じよ
 うやま)グラウンドにある、ボランティア用の
 テント村を訪ねた。登山家の野口健の提案で設
 けられた、ボランティアの集結場所だ。ここに
 泊まり込んで、ボランティアに出かければ、無
 駄がない。広いグラウンドは一面のテントで埋
 め尽くされていた。◆竹原所長に紹介された、
 願正寺というお寺をアポなしで訪ねた。寺は更
 地になっていた。しっかり残った庫裏から出て
 きたのは、まだ若い40才代の新住職と、身重
 の新坊守。初対面の私たちにも、実に丁寧に説
 明してくれた。本堂は修理不能なほど損壊した。
 苦渋の決断で、富山の業者に頼み、更地に。費
 用は1,500万円。その後、檀家と共に、す
 でに復興の計画を立てていた。檀家はまず、自
 分の家の再建を果たさなければならぬ。それ
 から寺の復興に当たるのは当たり前のこと。◆
 そこで、住職は思い切って、クラウドファン
 ディングの方法を採った。どうなるかは分から
 ないが、とにかく行動することを考えたという。
 住職は自坊が被災したにも関わらず、奥地の被
 害のひどい寺院にもボランティアに出かけたとい
 う。

過ごさねばならない。あくる日、蠟燭屋さん
 の仮店舗で買い物をした。安泉寺で使用する蠟
 燭は、この高澤蠟燭店で製造されている。ここ
 と取引がある名古屋の三清という店から私は購
 入している。そんなご縁もあり、是非訪ねよう
 と思った。◆社長に教えられて、城山(じよ
 うやま)グラウンドにある、ボランティア用の
 テント村を訪ねた。登山家の野口健の提案で設
 けられた、ボランティアの集結場所だ。ここに
 泊まり込んで、ボランティアに出かければ、無
 駄がない。広いグラウンドは一面のテントで埋
 め尽くされていた。◆竹原所長に紹介された、
 願正寺というお寺をアポなしで訪ねた。寺は更
 地になっていた。しっかり残った庫裏から出て
 きたのは、まだ若い40才代の新住職と、身重
 の新坊守。初対面の私たちにも、実に丁寧に説
 明してくれた。本堂は修理不能なほど損壊した。
 苦渋の決断で、富山の業者に頼み、更地に。費
 用は1,500万円。その後、檀家と共に、す
 でに復興の計画を立てていた。檀家はまず、自
 分の家の再建を果たさなければならぬ。それ
 から寺の復興に当たるのは当たり前のこと。◆
 そこで、住職は思い切って、クラウドファン
 ディングの方法を採った。どうなるかは分から
 ないが、とにかく行動することを考えたという。
 住職は自坊が被災したにも関わらず、奥地の被
 害のひどい寺院にもボランティアに出かけたとい
 う。

◆その前向きな姿勢に感動した。やがて作る新本堂は、軽い材料を使った、会館形式のもので、いざという時には、周辺の住民が避難できる建物にしたいという。以前にも寺の周りにはいくつかの入り口があつて、東西南北どこからでも本堂に入るようになるつていたという。◆つまり、日常の緊急避難場所の役割を果たしていたのだ。この考え方は私と同じ。日ごろから寺の役割を考えている人だと感じ入った。新坊守のおなかには、4月に生まれる赤ちゃんが誕生を待っている。若夫婦のやる気のもとには生まれてくる新しい命だったのだ！◆七尾市は何とかインフラは復旧して、日常生活はできている。宿舍の能登教務所内にある復興支援センターは、すべての施設が充実していた。広い部屋には多くの支援物資が並び、必要な方にはいつでも提供できる。私たち真宗大谷派によらず、宗派のネットワークが充実していると、そこに宿泊すれば、ボランティアの発基地になる。しかも、本山や名古屋教区の補助を受け、支援に向かうことができる。これは、東北支援でも同じことが言えた。一般のボランティアの方々はすべて実費で被災地に向かい、活動しなければならぬ。私たちは本当にありがたいと痛感した。

◆28日

この日は一日、近くの浄土宗のお寺の瓦礫撤去に費やした。宝幢(ほうどう)寺という古刹だ。元禄時代の創設という。内陣の四角の建物を残して、まわりの屋根はすべて崩落し、周囲は瓦礫の山となっていた。私たちを含めて13名の

ボランティアたちは、本堂に通ずる道を確保するために、瓦礫を撤去する仕事をすることになった。ヘルメット、防塵マスク、皮手袋、安全靴などのボランティアグッズに身を包み、全員が汗を流した。隊長は名古屋教区のT氏。八面六臂の働



きで、黙々と先頭を切つて仕事をこなした。そして、昼食時。これもT氏の所属する「でらボラNAGOYA」のグループが炊き出しセットまで積んで、温かいうどんを出してくれた。まさに、ボランティアのプロと言つてもいい。◆私たちは、今までにこのようなボランティアを体験したことがなかったので、特に高校生たちにとってはいい経験となった。高校生のボランティアは珍しく、みんなの注目となったに違いない。彼らは何があつても行きたいと申し出た。私たち大人が無理やり連れていったのでは全くない。自主的に申し出た。そこを買つてやりたい。◆作業中の休憩も実に楽しかった。はるばる水戸から車を飛ばしてやって来た坊さん。京都から電車を乗り継いで、歩いて寺までやって来たおじさん。彼は片目が見えないのに、錫杖を

つきながら現れた。でもみんなと一緒に、ハンディなく、瓦礫を撤去した。すごい！◆作業は果てしなく続いたが、誰もが生き生きと作業に徹した。その間に、連帯感が生まれ、各自の交流が図られ、和気あいあいの雰囲気が出された。◆宝幢寺の副住職も一生懸命に手伝った。その姿を見て、私は少し考えさせられた。私たちボランティアは何日もここで働くわけではないが、迎える住職の家族は、毎日その対応に追われることになるかも知れない。そうすると、疲れてしまうのではないか。ある程度ボランティアに任せておいて、家族の方々は、ゆっくり休んでいても良かったほうが良いかもしれない。そんなことを感じた。これは体験してみなければ分からないことだ。◆最後に、一同で記念写真を撮った。どの顔も輝いて見えた。別れの時の名残惜しさが、余韻となって今も残っている。

◆29日

最終日は、輪島の現状を見ることになった。高速道路が当初はズタズタだったが、う回路を設けて、何とか一方通行の道が完成した。通行中、本当に道路は陥没箇所が多く、必死の作業で、う回路を急ぎよ作ったという状況だった。◆輪島市内はまだインフラ整備もなく、水道が復旧しないために、トイレもままならない状況だった。朝市に通じる大通りも損壊が激しく、復旧はとてむできではない状態だ。そして、朝市の開かれていた通りは一面の焼け野原、まるで原爆投下後の広島の様

ようだ。(表紙参照)火災の勢いはすさまじく、鉄と陶器以外のすべてのものを焼き尽くした。まだ、撤収のめどすら立っていないので、火災後の姿がそのまま残っていた。◆地震の被害も甚だしく、ビルさえもが倒壊している。液化化も激しく、通りのマンホールも突出して危なかった。七尾よりもはるかに家屋の損壊はひどかった。◆さらに奥の珠洲市などの集落はもつとひどいだろう。現地に行く道すら、まだ復旧していない。ボランティアが入るには、道路状況が良くならないと困難だろう。このように、まず、道路、水、電気、食料と言った順に復旧が待たれる。おそらく、私たちが数日宿泊してある程度のボランティア活動ができるようになるにはまだまだ時間がかかりそうだ。

◆全体を通して感じた事

①宗門ネットワークの心強さ…継続的に支援できる安心感◆②現地の人達との交流…被災の状況を聞き、参考にすることができる◆③ボランティア活動…初対面の人との交流で世間が広がる◆④息長く支援する…「また来るね」と言ってきたのはNG。持続せよ◆⑤教訓を生かす…耐震補強の重要性を痛感。

アキラ③

◆アキラくんは不思議そうな顔をして、僕を見上げてこう言ったのです。◆「僕が悪いことをして、泥棒になってたら、お母さんは喜ばないんじゃない。お母さんはきつと泣くよ。」ということを申しました。◆園長さんも、保母さんも、僕もそのとき、彼に手をつけて謝りました。僕たちは常識から言ってお母さんはもう死んでいると思っていました。◆しかし、お母さんの遺体を見ていない彼にとっては、その確証は何にもないわけです。お母さんと会える日を夢見たって、それは決して無理なことではない。◆そのとき僕はどうして戦争ってこんな子供をひどい目に合わせるのだろうと、あらためて戦争を憎みました。そして、アキラくんが逃げますと、行くところは決まっているのですから、何時間かたつてから行くのです。◆あつちは歩いて行くのです。僕は電車で行くのですから、時間を見計らって、追っかけて行くのです。◆でも捕まえに行く人間のほうが先に着くことが多いので、「こととい橋」のたもとに陰に隠れて待っている、アキラくんが転びそうになつて来るのです。◆栄養失調の子ですから、おなかが出ていて、頭がでっかい子でしょう。頭の重みで転びそうになって来るのです。で、やっとたどり着いて何をするのかというと、川を眺めて石を投げているだけ、何にも

するわけじゃない。◆そうやっていけばいつかあの晩別れたお母さんが出てきてくれるのではないかと思っ
ているような彼でした。◆これは逆の場合もありまして、あの晩、子供がどこかへ行ってしまつて、お母さんだけが残つたお話も一杯あります。◆で、今でもです。何十年も経っている今でも三月十日になりますとお母さんが（おばあちゃん）あのと別れた小さな子供のことを想つて、半紙の上のみかんとかキヤラメルとかを盛つて、隅田川のとみに置きに行くそうです。◆お母さんにもそんな人がいるように、子供にもアキラくんのような子がいたのです。◆彼は川面をじつと見つめています。せつかく来たのにすぐ捕まえては可哀そうですから、少しおいといてやろうと思つて、三十分ぐらいたつてから、肩をたたいて、「アキラ、もういいか、気が済んだら帰ろうか。」と言いますと、普通だったら捕まりそうになりますと、反抗するとか逃げるとかしますが、全然そういうことはないのです。◆もう毎度のことですから、にっこりと恥ずかしそうに笑ひましてね、立ち上がつて僕と手をつないで帰つて来てくれました。
(続く)



ともに歩み、命に寄り添う

第十一回 旅立ちのとき

浄香きよか

「はい朝刊!」。看取り五日目の朝、父は新聞を読んでいましたが、容体がさらに悪化。今日からは、父と二人で過ごそう。そう思いながら、父の背中をポンポンたたき背中をかき……。お昼頃になると父がいきなり「お風呂に入りたい」と言い出した。「あのね、髭を剃りたいし、髪を洗ってさっぱりしたい」とのこと。息苦しそうにしているのにお風呂に入れるのかしらとも思いましたが、訪問看護師さんに来ていただき、父をお風呂に入れていただきました。「ああさっぱりした!」と父はうれしそう。ところが、夜になると容体が急変。呼吸が乱れて息苦しそうなのに、父は自ら酸素濃縮装置のマスクを外しました。私はとてもつらくて見ていられません。私はお仏壇の前で手を合わせ、「お母さん、見ているのがつらすぎるので、もう楽にしてあげよう。お迎えにきて」と言ってしまったのです。父の部屋に戻ったとき、父は顎を上下に動かし不規則な呼吸をしていました。「お母さんに頼んだから、もうお迎えにきちゃったの?」と後悔する私。「ああ、お父さんはもうダメだ」。そう感じた時、在宅ケアクリニククの先生に電話しようとしたのですが、先生が来られるまで約二十分。部屋まで入っていただくためには門と玄関の鍵を開けなければなり

ません。もし、その間に父が亡くなったら、父はどんなに不安でしょう。電話をかけるか、父に寄り添うのか。私は、その瞬間、どうしても父に寄り添いたかった。だから在宅看取りを決意したのです。私は覚悟を決めました。私は父の手をとり、背中をさすりながら「おつかれさまでした。お浄土でお母さんと一緒に私をずっと見守ってね」と語りかけました。「人は亡くなるとき、最期まで声だけは聞こえている」と先生から教えていただきました。どうか、私の声が父に届きますように。そう願いながら「ありがとね」と言い続けると、苦しそうにしていた父は、スツと息を吸い動かなくなりました。私は尊い命の終わりを、生から死への瞬間を、父と私の手を通して体感したのでした。私は、動かなくなった父を見ながら、看取りとはとても尊い行為なのだと思います。先生に「今、亡くなりました」と電話をすると、真夜中にもかかわらず、すぐに来てくださり死亡確認をしていただきました。昼間にお風呂に入れていただいた看護師さんも来られて、私も一緒にエンゼルケアのお手伝いをさせていたただくことに。「もう一回、学校に行きたいな」。父は最期までかつての職場に行きたいと言っていたので、父の勝負服のスーツを私も一緒に着せました。目の前に、安らかな顔をしてビシッと決めた父がいました。すべてが終わり、父と二人きり。静かな夜明けを迎えたのでした。



5月の行事予定

大成講 一日(水)

ヨガ教室 十一日(土)

東別院募金活動 十二日(日)

文芸クラブ 十五日(水)

写真クラブ 十八日(土)

今月の掲示板

人は右翼だ、左翼だと言いま
すが、片方の翼だけでは鳥は
空を飛べません

ある高校生

◆前号の高校生の答辞より、老僧が最も感じ
入った言葉です。人は争いを超えて、ともに理
解し合うことよってのみ、生きていけると思
います。

いずみのほとり

◆四月四日、東海市にある真宗大谷派の寺院が全焼
しました。なんと、三月、七尾市の倒壊したお寺で、
一緒に片付けをした名古屋の別のグループの一員に、
その寺の若院さんも含まれていました。自坊へ帰っ
て来て、四月三日、花まつりのお菓子の手作りド
ーナツを沢山揚げて、廃油を固めるテンブルちゃん
で処理しようとしていたところ、葬儀の連絡が入り、
その場を離れて打ち合わせをしている間に発火し、
炎が天井を突き抜けて手が付けられない状態になっ
たと、住職が説明してくれました。◆私が所属する
「でらボラNAGOYA」に応援の依頼がありました。
本堂の奥に置かれた檀家さんのお骨が散乱している
ので、僧侶の方々に収骨して欲しいとのこと。檀家
さんをお願いするのは忍びないとのことでした。◆
四月十八日の午後、その寺院を訪れました。畑の中
にあるお寺で、幸い類焼は免れ、亡くなった方もみ
えないということで、それは不幸中の幸いでした。
本堂・庫裏・離れともすべて灰燼に帰し、無残な状
態でした。◆二時過ぎに作業開始、三々五々人数が
増え、ピーク時は四十人以上になりました。◆骨壺
が散乱したあたりに、お骨がありました。まるで、
遺跡の発掘作業です。皆さんが献身的に作業をして
下さり、五時前には段ボール一杯のお骨が集められ
ました。◆我が安泉寺は、過去二度の火災に遭いま
した。私が十七才の時に庫裏が全焼、二十七才の時
には本堂が全焼しました。◆安泉寺の復興の記録を
住職に手渡し、必ず復興しますと、元気づけてきま
した。あたりは春爛漫の様子、どうか、前を向いて
生きて行って欲しいと心から思いました。